



## 日野町上野田の 火振り祭・芝田楽

日野町立日野小学校  
校長 満田 良順



「火振り祭」は、日野町上野田にある口之宮こうづけだ神社の境内で、上野田と里口の両地区の人々により、毎年、8月15・16日の両夜に行われています。

この祭には、古い歴史を持つ田楽座の早乙女さおとめも関係しており、県下では例の無い民俗行事であると思われるので、その概要を紹介します。

まづ、15日の午後より、小学生たちが、鉢巻と浴衣にたすきがけという出で立ちで、祭が行われることを村中に触れ歩きます。

2対の高張り提灯を先頭に、「タンタ、タンタ、タタタン」と締太鼓を軽快に打ち鳴らしながら、長さ1メートルあまりの青竹の先を少し割った「ばんばら竹」と呼ばれる警護用の竹を手に、「ホイノコ、ホイノコよ。松明、集めろ」と呼びかけつつ、昔からの古い道を2列縦隊で触れ歩きます。この子どもたちは、

昔から「ホイノコ」と呼ばれています。

ホイノコの声にうながされ、家々では松明づくりを開始します。この松明は、長さ2～3メートルの枯れた割り竹を束ねて、藁でしばったもので、昔は各家の男子の数だけ作ったと言われていたのですが、平成15年8月15日に



村中に触れた歩くホイノコ

は、雨天となったためにやや少なく86本、天候が回復した翌日の16日には124本が作られ、例年、百本余りが作られています。

夜7時頃、かがり火に照らされた五社神社(上野田)に、両地区の人々が松明を手に集合します。やがて、祭の中心となる「<sup>かみこ</sup>神子」3人(8歳の男子)による「盃の儀」が拜殿で行われた後、本殿への参拝を済ますと、人々は一斉に本殿前のかがり火から各自の松明に点火します。それとともに締太鼓が激しく打ち鳴らされ、宮入りの行列が<sup>ひばりの</sup>雲雀野へと進みます。



松明を手に口之宮神社へ

道中では絶え間なく締太鼓が打ち鳴らされ、燃えすぎる松明を、ホイノコたちがバンバラ竹で吹き消す姿が、あちらこちらで見られます。

雲雀野に到着すると、一行は境内の外周を一巡します。この時、松明を手にした人々の間から、あちらこちらで「松明上げよ～」という威勢の良い声が掛けられます。一巡を終えた後、松明を手にした人々は、境内中央の松の木を取り囲み、火振り開始の合図を待ちますが、この間、松明を投げやすいように、松明の燃え残り具合を調整しながら待ちます。



祭の中心となる神子

一方、神子3人は、口之宮神社に参拝を済ませた後、神殿前に着座します。やがて、7時30分頃、高らかに打ち鳴らされる締太鼓を合図に、境内中央に生えている一本の松の木にめがけ、松明が次々と投げ上げられます。

この松の木は、高さ15メートルほどあり、その先端をめがけて30~50センチほどに燃え残った松明を投げ上げるのですが、松明が思いのほか軽いため、うまく投げ上げることが難しく、現在では、若者が中心となって他の人の松明も投げ上げています。暗闇に立つ松の木めがけて百本余りの松明が、次々と投げ上げられるのですから、まさに火が乱舞する状態です。この様子から「火振り」という名前がつけられたのでしょ。

たまに、松明が松の枝先に引っかかると、見物人から歓声や拍手がわき起こりますが、松明が多く引っかかった年は豊作になると伝えられ、火振り祭は、五穀豊穡を祈る神事であるとも言われています。

火振りが一段落すると、締太鼓が激しく打ち鳴らされ、神子3人が警護の人々とともに退席し、初日の祭が終了します。

翌日の16日の祭も、同じ式次第、同内容で進行され、初日より30分遅く開始される違いがあるだけです。

以上、現行の火振り祭の様子を紹介しましたが、次に、この祭の性格について考えてみることにしましょう。



この火振り祭について古記録などはなく、いつ頃から、どのような目的で行われているのかは不明です。しかし、この祭が盆の期間に行われていることから、盆の行事として、祖先の霊を迎える15日の「迎え火」、16日の「送り火」の行事として行われているのであろうと考えることができます。

このことは、使用される高張り提灯に「魂」の一字が記されていることからもうかがうことができ、さらに明治時代の火振り祭の様子を詠んだ一句に、「たま（霊）祭る、西野（雲雀野）の里の 松の火は 心の花の さけるとや見む」とあって（『近江日野町志』巻下、419頁）、この祭が盆行事としての性格を持つ祭であることが知られます。



「魂」の文字が記された高張り提灯

日野地方の盆行事では、村はずれの山の頂で迎え火・送り火を焚く「おしよらい（御招霊？）さん」の行事が一般的ですが、和歌山・山口・福岡県などの一部の地域では、高い柱の先に松明を投げ上げて火を灯し、迎え火・送り火とする「柱松」の行事が行われており、すでに鎌倉時代に記された『源平盛衰記』にも、近畿地方の柱松の記録が見えます。

火振り祭も、柱松の一例として分類できる行事であったことが知られます。盆の行事には、仏教的な色合いの濃い行事が多いのですが、古い時代には、仏教とは係わりのない民俗行事としての盆行事が行われており、現在、神事色の強い火振り祭も、元は素朴な民俗行事として行われていたと考えられます。

この火振り祭には、3人の神子が係わっていますが、この神子は、火振り祭以外に、5月3日に行われる日野祭においても、中心的な役割をはたしています。

日野祭は、日野町村井にある綿向神社の春の祭礼で、16基の曳山も登場します。この神社は日野地域で最も広い氏子圏を持ち、「蒲生郡総社」と記す過去の記録もあります。

日野祭では、「芝田楽」と呼ばれる一団が、祭礼に関する一切の権限をもち、神輿の渡御・還御の先駆けを行っており、記録上では、すでに室町時代にはその存在が確認できます。この芝田楽は、上野田地区の約100名余りの人々で組織される「神調社」と、火振り祭にも係わる神子3名で成り立っています。神調社は神子を警護し、祭礼を取り仕切ることを任務としており、神子は、日野祭時には、74本の御幣で組まれ、先端部に御幣を刺した笠を被り、手甲、脚絆などの田植え装束を身につけており、昔は女兒であり、3月23日に行われた「かさしまけの神事」で、上野田地区の女兒から3名が選ばれたと伝承しています。



日野祭で神子を警護する神調社

田楽は、本来、田植えを始める「さびらき」時に、田の神を迎えて、田植えが無事終了することを祈って行われた農耕儀礼としての芸能ですが、一般的に、田の神は、早乙女の身に寄り憑くと信じられていました。神が憑



く人間のことを「ヨリマシ」と呼んでいます  
が、ヨリマシを選び出す儀式が「かさしまけ  
の神事」で、「かさしまけ」とは、漢字で「挿  
頭任」と書き、頭に御幣や櫛をさす者、つま  
りヨリマシを任命することを意味します。

このことから、上野田の芝田楽の場合も、  
田植え装束を身に付ける神子は、田楽の早乙  
女であり、神調社は田楽座であったと考えら  
れます。現在では、田楽を演じることはなく、  
弘治3（1557）年の祭礼記録には、「鉦、太鼓、  
笛、ささらなどにて囃し立渡る也」と記され、  
曲芸的な「蜻蛉取り（とんぼ返り）」などが演  
じられた様子で、その頃の「田楽舞歌」の一  
部も伝えられています。現在では、締太鼓  
のみが使用され、かつて使用されていたであ  
らうと思われる鼓が、日野祭時には締太鼓に  
くりつけられます。

このように、上野田の芝田楽は、古くは、  
上野田で田植え時に行われていた田楽であり、  
上野田という地名も、田植え開始時に「神を  
憑ける田」を意味する「神憑け田」から生ま  
れたものと考えられます。

綿向神社の記録には、「永和年中（1375～79）、  
綿向祭礼の再興の時、神興、中途にて止まり  
給う。（中略）出雲氏支流榎本氏、折節、田植  
えの頃にて農人の田楽を舞ひ居けるを引き連  
れ、米を炊し上げ神興に供へ、芝田楽を奏し  
ければ、神興軽々と上り御旅所へ御幸奉る」  
と見え、この事件をきっかけとして、上野田  
の芝田楽が日野祭にかかわり始めたと伝えて  
います。

この伝承はともかく、一般的に、芝田楽と  
呼ばれる田楽は、神社の「芝（境内）」で演じ  
られる田楽のことです。この永和の頃から日  
野地方が大聖寺（京都）の領地になり、正元3  
（1209）年に焼失して衰退していた綿向神社が、  
大聖寺によって至徳3（1386）年頃から大々  
的に再興されていることから、おそらく、大  
聖寺により、上野田の田楽が綿向神社の祭礼  
に奉納される伝統が生まれたと考えられます。

やがて、天正12（1584）年に蒲生氏郷が伊勢  
国へ転封されたため、10数年間、綿向神社が  
荒廃することとなり、以後、芝田楽は演じら  
れることなく、今日まで芝田楽の名前のみが  
伝えられてきたのです。

このように、上野田の芝田楽の歴史には、  
古くから上野田の田植え時に演じられていた  
田楽が、中世の時代からは綿向神社に奉納さ  
れる芝田楽に姿を変えて行くという歴史があ  
ったのですが、綿向神社と係わりを持ちは  
じめると、田楽の早乙女は、綿向神社祭神の  
神子（神の子）として扱われるようになります。  
火振り祭に係わる子どもたちが「ホイノ  
コ」と呼ばれるのも、神子に選ばれる上野田  
の子どもたちが、綿向神社の祭神である「天  
穂日命のほひのみこと」の子ども、つまり「穂日ほひの子こ」であ  
ると意識されたことからなのでしょう。

芝田楽の神調社は、火振り祭には関係せず、  
春先に選ばれた神子の任務は、火振り祭が終  
わることで終了します。

なお、昔の火振り祭では、五社神社から雲  
雀野へ向かう時に、里口周辺の水田の畦道か  
ら上野田周辺の畦道を巡り、その後には火振り  
を行ったと伝え、かつては虫送りの行事をも  
兼ねていた様子です。里口地域の稲の害虫を  
上野田へ送り、上野田地域の害虫とともに、  
口之宮神社のある村はずれの「野（雲雀野）」へ  
村送りする行事として行われていたことから、  
現在の火振り祭でも、隣接する上野田と里口  
の両村が関係しているものと思われます。

以上、火振り祭は、神子やホイノコなどの  
子どもを主役とする行事として、昔から今日  
まで連綿と伝えられてきたのです。

一部の写真は、上野田のキタギシ写真館、  
日野観光協会から提供していただきました。

滋賀文化財教室シリーズ No.209号

発行年月日 2004年1月31日  
編集・発行 財団法人 滋賀県文化財保護協会  
〒520-2122 大津市瀬田南大萱町1732-2  
TEL(077)548-9780 FAX(077)543-1525